

慈善主体の世俗化に関する一考察：イギリス・チューダー期を中心に

松山, 毅 / MATSUYAMA, Takeshi

(出版者 / Publisher)

法政大学現代福祉学部現代福祉研究編集委員会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

現代福祉研究 / The bulletin of the Faculty of Social Policy and Administration : reviewing research and practice for human and social well-being

(巻 / Volume)

5

(開始ページ / Start Page)

81

(終了ページ / End Page)

107

(発行年 / Year)

2005-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00001994>

慈善主体の世俗化に関する一考察

ーイギリス・チューダー期を中心にー

松 山 毅

1. はじめに

一般に、中世における慈善思想・活動は「自己の魂の救済のため」という名目で、相手の必要に関係なく施しをバラまくという自己中心的な行為として語られることが多い。そして近世に入り、ルターなどの宗教改革者たちの指摘により「信仰」に基づいた隣人愛実践の復活が訴えられるようになり、慈善思想にも大きな変化が見られるようになった。それは今一度、「キリスト者としての慈善の義務」を再確認し、「施与の功德」ではなく「信仰行為」として慈善を行わなければならないことを訴えたものであった。そして自己の都合にばかり引きつけられた慈善行為を、「社会の必要性」という観点から、つまり「社会的義務」「社会的行為」として捉え直さなければならないことを指摘した。

これらの影響もあり、1520～40年にかけて、大陸諸都市を中心に救貧行政が「世俗化」されるようになる。それは宗教組織が専横してきた慈善行為が、都市行政による救貧組織の一本化という「世俗化」により再編成されていく過程であるといえる。同様にイギリスでも、ヘンリー8世治下の同時代に、エリザベス救貧法につながる救貧立法が相次いで成立し、またイギリス宗教改革の流れで、慈善活動の拠点であった修道院や教会が没収・規模の縮小を余儀なくされ、貧困者を中心とする救済活動が変質を余儀なくされる時代であった。当然のことながら、当時の慈善活動は衰退したと推測されがちだが、ジョーダンの研究によれば、確かに宗教への慈善は激減しているが、教育や貧困救済、社会統制などに関する慈善は依然として高い数字を誇っていることが実証的に示されている（Jordan ; 1959、松山 ; 2003）。その背景には、封建制の弛緩とともに身分階層による縛りにとらわれなくなってきたこと、初期資本主義の形成過程で商人層が台頭してきたこと、などから、慈善活動に対する新しい担い手が登場してきたことが指摘されている。

筆者はこれまで、エリザベス救貧法が本格的に準備されたチューダー期（1485-1603）のチャリティについて考察してきた（松山 : 2004）。その中で、チューダー期のチャリティの特徴として、「世俗化」をキーワードに、「慈善の担い手」「慈善の思想」「慈善の運営・管理」の三側面の世俗化

について論じてきた。本稿は、とくに「担い手」つまり「慈善主体」の変容に焦点をあてて論述したものである。まず、ジョーダンの研究をもとに各主体ごとの慈善拠出の量、種類の概観、比較を行う。その上で、チューダー期に慈善の担い手として浮上したジェントリ層について考察し、担い手の側面からチューダー期慈善の変容を確認していきたい。

なお、ここで使用される「世俗化」とは、宗教の影響下にあった政治、法、教育などがその支配を脱し、世俗的な原理に基づいて再構成されることである。近代化とともに社会に中における宗教の影響力が弱まり、世俗的な思考・態度・勢力が強まっていくことを意味している。

【補論】遺言書作成の身分・職業分布と推移

ジョーダンの遺言書統計をもとに本稿では慈善の担い手の世俗化を論じる予定だが、もともととは高貴ではない身分の者たちが積極的に遺言書を作成していたわけではない。貴族やジェントリ層、聖職者たちが主流であった遺言書作成が、ヨーマン層や商人層に定着し始めるのは、16世紀に入ってからであるという。とくに1550年ごろに大流行したインフルエンザによる死亡率の上昇は、成人男性の約3分の1を占めるといわれる「より上層でないもの（農民層や様々な商人・職人層の人々）」たちによる遺言書作成の慣習化を推し進めたという。

また、遺言書に身分の記載が明確にされるようになるのも1560年代以降であるという。というのも、もともと16世紀初頭あたりまでは、遺言書の作成の動機が「信仰による魂の遺贈」という色彩が強い時期であり、身分の記載というような俗事的な事項はあえて文面に盛り込まない、という関係者の方針や時代の雰囲気があったと考えられている。しかし1560年前後から身分・職業を記載した遺言書が年を追うごとに増えてくる。それは以前より記載されることもあった商人に加え、大工、魚商、パン屋、蠟燭工、小間物商、船員などが登場しはじめる。これらは、基本的には商人を基本とした裕福な者が従事する職種か、あるいは必ずしもその職種が裕福さの裏づけはなくとも「有力な者」であったということが考えられる。以降、1580年代までに業種は毎年2、3種類ずつ増えつづけ、約60種あまりの身分・職種が遺言書に記載されるようになった。これには、遺言書作成の目的として、より一般的にみられる「死後の家族扶養に関する配慮」が遺言書作成の主たる動機として定着しはじめていたことも考えられるという。

こうして、16世紀前半までには遺言書に身分・位階・職種について言及するものは2割程度であったものが、16世紀後半には約7～8割まで着実な増加を示したという。うち約7割が非農業部門であったという。（高橋：1999、2000）

2. 慈善の主体について

チューダー期の慈善の推進力は、主にジェントリ層と商人層が担っていたと考えられる。というのも、かれらは初期資本主義の発達、宗教改革による価値観の転換、新しい社会思想（イギリス・ルネサンス、ヒューマニズムやプロテスタンティズム）への敏速な順応、などを背景に、時代の先を見抜き、イギリスの新しい生活様式や文化の方向性を示し、そして実行していった、まさに先導役としての役割を果たしていたからである。

さて、ジョーダンはチューダー期・スチュアート期（1485-1660）の期間の慈善に関する遺言等を分析し、慈善の量的変化、内容の変化、担い手の変化、などをまとめている（Jordan:1959 p342-361）。そして担い手としては、王室 crown、貴族 nobility、上層ジェントリ upper gentry、下層ジェントリ lower gentry、ヨーマン yeoman、農民 husbandmen、日雇農業労働者 agricultural labourers、高位聖職者 upper clergy、下位聖職者 lower clergy、大商人 merchants、小商人 tradesmen、一般市民 burghers、職人 artisans、専門職 professions、という社会階層として分類している。

王室とは、国王とその直系家族のことである。

貴族とは、血統・門閥・財産などにより政治的・法的に特権が与えられた人々のことである。

ジェントリとは基本的に土地所有者であるが、中でも上層ジェントリは騎士 knights の称号またはその直系の家族であり、長い間その経済力によって社会的地位を享受してきた階層である。下層ジェントリは定期借地農となった裕福な農民層・商人などである。

ヨーマンはこの時代の最も代表的な社会階層であり、自由保有地 freehold lands・謄本借地 copyhold lands・定期借地 leasehold landsで農業を営む独立自営の農民層である。ただし、下層ジェントリとの境目は必ずしも明確ではない。

日雇農業労働者は貴族、ジェントリ、ヨーマンに雇われて農業に従事する賃金労働者や家庭使用人のことである。チャリティの担い手としてはほとんど現れることはなく、むしろ agricultural poors として施しを受ける側ですらあった。

高位聖職者は司祭 bishops、大修道院長 abbots、小修道院長 priors などである。下位聖職者は主に農村部に居住する教区司祭・牧師であり、聖職者全体の90%を占めていた。

大商人は主として都市において卸売の商業を営む者で、投機的企業家 speculators・事業家 entrepreneurs として莫大な富を蓄積した人々である。

小商人は大商人よりも小規模な事業を経営する者で、小売商店主 shopkeepers、旅館経営者 innkeepers、ビール醸造者 brewers、ろうそく製造販売者 chandlers、などである。彼らは都市の有

力な中産階級であった。なお、それ以外の市民権を得ている小さな事業所経営者やその未亡人など、自分の意思で遺言財産を遺せた人達を「一般市民」burghers として表している。彼らはジェントリや商人と重なっている者も含まれているという。

職人は特殊技能者 artisans、産業労働者 industrial workers、運搬人 porters、使用人 servants、都市労働者などからなっており、都市の浮浪貧民とともに下層階級を形成していた。

専門職は、法律家 lawyers、医師 physicians、官吏 public officials、代書人 scriveners、公証人 notaries、薬剤師 apothecaries、教師 teachers、教区聖職者 parish clerks、監督官 administrators、芸術家 artists、学者 scholars、などである。

3. 主体ごとの「寄付の度合い depth of giving」について

ここでは、図表をもとに各階層ごとの寄付者数・金額を確認し、あわせて地域毎の慈善の額の比較を試みる。

表1 階層ごとの寄付者数、金額、人数の割合

	寄付者数	寄付総額における割合(%)	寄付者総数における割合(%)
王室	36	4.63	0.1
貴族	192	4.02	0.55
上層ジェントリ	959	5.53	2.74
下層ジェントリ	3753	5.84	10.73
ヨーマン	5144	1.49	14.71
農民	5079	0.09	14.53
農業労働者	634	0.005	1.81
高位聖職者	175	4.97	0.5
下位聖職者	1561	4.55	4.46
商人	3679	43.17	10.52
小商人	2640	4.82	7.55
市民	1557	2.91	4.45
職人	2087	0.28	5.97
専門職	866	6.31	2.48
不明	6601	11.4	18.89
合計	34,963	100.01	99.99

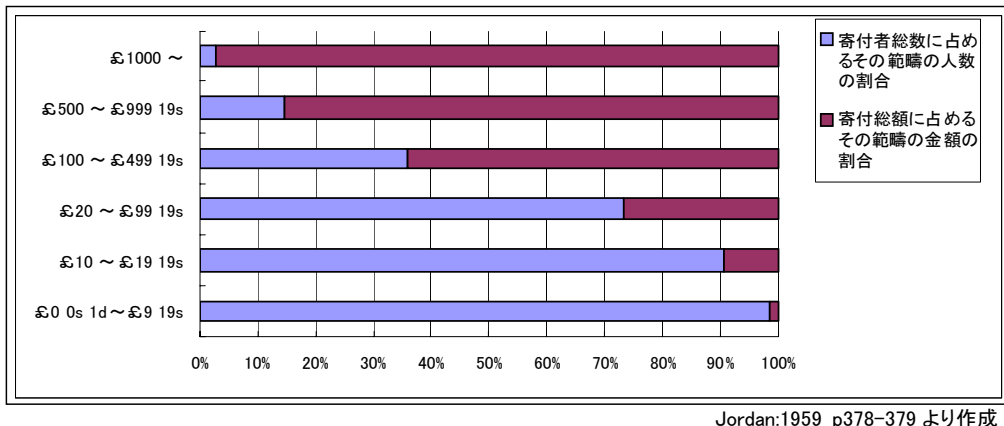
(Jordan:1959 p338 から引用)

表2 寄付の度合い(ロンドン・サマセット・ヨークシャーの寄付者判明分)

判明分 (人)	階層	人数	£0 0s 1d ~£9 19s	人数	£10 ~£19 19s	人数	£20 ~£99 19s	人数	£100 ~£499 19s	人数	£500 ~£999 19s
18	王室	1	£ 2 0		£ 74 13s	2	£ 74 13s	6	£ 1166 7s	1	£ 653 0s
119	貴族	13	£ 59 0	7	£ 82 0	38	£ 1315 7s	31	£ 8170 11s	14	£ 9839 14s
416	上層ジェントリ	91	£ 383 16s	65	£ 799 15s	130	£ 5973 8s	95	£ 19148 7s	22	£ 14848 11s
1772	下層ジェントリ	1032	£ 2981 5s	224	£ 2766 13s	342	£ 14741 8s	148	£ 27470 0s	17	£ 11027 8s
2539	ヨーマン	2204	£ 4343 10s	119	£ 1477 19s	178	£ 6564 8s	36	£ 6137 5s	1	£ 540 0s
3927	農民	3910	£ 1481 12s	12	£ 139 15s	5	£ 146 12s				
192	農業労働者	190	£ 44 3s	1	£ 10 0s	1	£ 20 0s				
75	上位聖職者	5	£ 19 15s	5	£ 57 0s	7	£ 337 7s	27	£ 7042 12s	13	£ 8808 3s
747	下位聖職者	413	£ 1141 6s	91	£ 1226 6s	122	£ 5739 11s	91	£ 18163 3s	14	£ 9293 1s
3121	商人	868	£ 3129 16s	359	£ 4591 6s	783	£ 35441 15s	763	£ 172010 15s	159	£ 112397 6s
1781	小商人	929	£ 2637 17s	210	£ 2596 7s	400	£ 17102 1s	191	£ 39310 0s	31	£ 20244 7s
1021	市民	446	£ 1775 4s	155	£ 1901 14s	259	£ 10694 18s	143	£ 26264 9s	15	£ 8992 0s
1091	職人	1045	£ 1865 10s	23	£ 268 13s	20	£ 816 13s	2	£ 200 0s	1	£ 696 11s
631	専門職	234	£ 1498 16s	77	£ 938 9s	150	£ 6184 19s	117	£ 22954 7s	23	£ 15403 14s
17450		11381	£ 21363 10s	1348	£ 16855 17s	2437	£ 105153 0s	1650	£ 348037 16s	311	£ 212743 15s
		65.22%	1.04%	7.72%	0.82%	13.97%	5.11%	9.46%	16.91%	1.78%	10.34%

Jordan:1959 p378-379 より引用

図1 寄付の度合い（寄付者数と寄付金額の関係）



わかることとしては、

- ① 寄付者の約半数（49.53％）は農村部に居住している者であるが、寄付金額で言うと都市部の拠出が63.46％と多くなっている。ただし当時の人口は、農村部に80％の住民が居住していたことを考えると、都市部のほうが寄付者の割合は高くなるといえる。また、一人あたりの慈善の金額も都市部の方が高いことがわかる。（表1，表2）
- ② 各階層の人数、慈善寄付金額の拠出の範囲、寄付金額の合計、をみてみると、明らかに人数・金額ともに商人層が多いことがわかる。ヨーマン、農民は寄付者数は多いが、金額ではほとんど貢献していないことがわかる。つまり一人あたりの寄付金額が少ないのである。逆のことは王室・貴族・専門職にあてはまる。寄付人数は多くないが、金額での貢献は高い。つまり一人あたりの拠出金額が多いのである。（表2，図1）

地域差、階層差が慈善の拠出や慈善の社会的位置・役割に大きな影響をあたえていることが考えられるだろう。この点については、5．および6．で詳述する。

4. 主体階層毎に見た慈善の内容の推移について

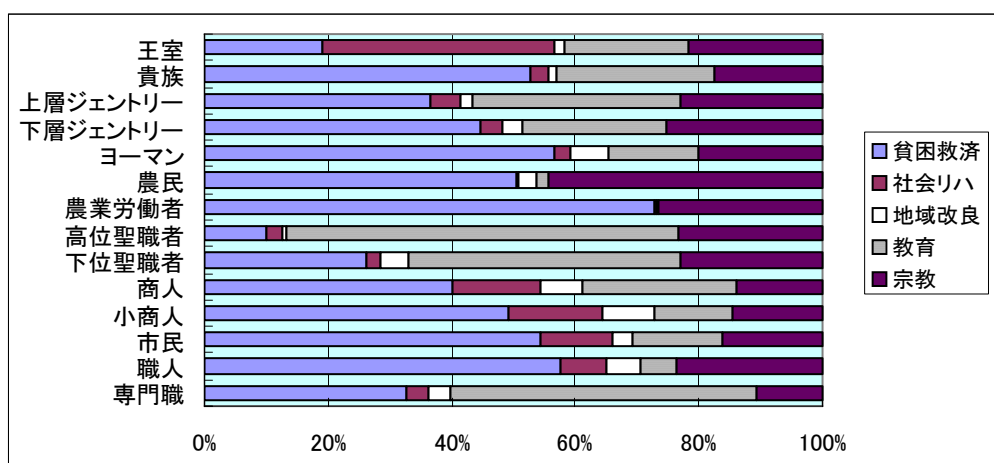
各階層毎のチャリティの傾向についてポイントだけを指摘する。なお、各階層ごとの特徴については、Jordan;1959, p342-361 を参照した。

表 3 階層ごとの慈善寄付額の構成

階層	貧困救済	社会リハ	地域改良	教育	宗教	計
王室	£ S 27.304 9 (19%)	£ S 54.026 (37.61%)	£ S 2.173 (1.51%)	£ S 29.112 3 (20.27%)	£ S 31.028 2 (21.60%)	£ S 143.643 14
貴族	65.669 7 (52.68%)	3.700 (2.97%)	1.581 13 (1.27%)	31.961 (25.63%)	21.751 4 (17.45%)	124.663 4
上層ジェントリー	62.916 3 (36.35%)	8.358 9 (4.87%)	3.460 6 (2.02%)	57.780 9 (33.66%)	39.143 2 (22.80%)	171.658 9
下層ジェントリー	80.619 1 (44.52%)	6.972 2 (3.85%)	5.382 11 (2.97%)	42.280 18 (23.35%)	45.837 15 (25.31%)	181.092 7
ヨーマン	26.062 8 (56.52%)	1.211 11 (2.63%)	2.901 5 (6.29%)	6644 14 (14.41%)	9.294 16 (20.16%)	46.114 14
農民	1.419 19 (50.43%)	13 13 (0.48%)	76 8 (2.71%)	54 2 (1.92%)	1.251 13 (44.45%)	2.815 15
農業労働者	119 17 (72.75%)	0 14 (0.42%)	0 11 (0.33%)		43 13 (26.49%)	164 15
高位聖職者	15.484 14 (10.04%)	3.872 7 (2.50%)	1.165 2 (0.76%)	97.839 1 (63.45%)	35.832 19 (23.24%)	154.194 3
下位聖職者	37.151 8 (26.33%)	3.233 18 (2.29%)	6.029 15 (4.27%)	62.070 11 (44.00%)	32.594 12 (23.10%)	141.080 4
商人	535.712 13 (39.99%)	190.589 5 (14.23%)	92.632 9 (6.92%)	334.203 18 (24.95%)	186.360 13 (13.91%)	1,339.498 18
小商人	73.412 6 (49.06%)	22.776 19 (15.22%)	12.776 19 (8.43%)	18.868 19 (12.61%)	21.964 17 (14.68%)	149.642 19
市民	49.022 19 (54.34%)	10.526 3 (11.67%)	2.877 1 (3.18%)	13.066 17 (14.47%)	14.730 4 (16.33%)	90.223 4
職人	5.000 19 (57.49%)	663 19 (7.63%)	477 13 (5.49%)	493 3 (5.67%)	2.063 17 (23.72%)	8.699 11
専門職	64.211 19 (32.82%)	6.781 1 (3.47%)	6.959 14 (3.56%)	96.813 4 (49.49%)	20.864 11 (10.67%)	195.630 9

Jordan; 1959 p384 より引用

図 2



Jordan; 1959 p384 より作成

① 貴族

貴族層はその半分以上を貧困救済に拠出している。その傾向は、地方へいくほど高いものとなる。多くは中世来の救貧院の基金への寄付か、死後の冥福を祈ってもらうための寄付であり、この分野への寄付は宗教改革前後をピークに減少していつている。二番目に関心が高いのが教育への寄付である。その多くは大学 universities の設立・運営に関するものであり、これはのちに触れる高位聖職者と専門職にも共通する傾向である。社会適応や地域改良に対する寄付は、この期間を通してほとんど関心が払われていない。宗教に対する寄付は、先の貧困救済への寄付と重なる部分があるが、宗教改革前後で大きな変動がある。しかしその対象の多くはチャントリー chantries の建設・維持にかかわるものや、教会の建設基金への寄付が中心であった。

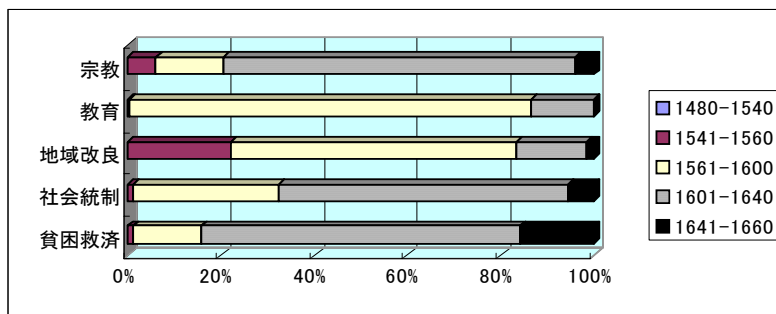
この時期の貴族によるチャリティは、金額的にも人数的にもそれほど大きな集団を形成するものではないといえる。というのも、かれらの身分はチューダー期には固定化しており、財産に関しても負債が多く、経済的には苦戦を強いられていたようである。よって、貴族層は新しい社会作りや社会秩序の形成・促進にはほとんど貢献できず、他の階層に委ねるしかなかったのである。

表 4-1 貴族

	貧困救済	社会適応	地域改良	教育	宗教	計
	£ s	£ s	£ s	£ s	£ s	£ s
1480-1540	3578 16 <10.56%>	45 0 <0.13%>	893 7 <2.63%>	18967 0 <55.97%>	10406 0 <30.71%>	33890 8 <27.18%>
1541-1560	813 6 <46.45%>	45 0 <2.57%>	153 6 <8.76%>	40 0 <2.28%>	699 7 <39.94%>	1750 19 <1.40%>
1561-1600	8989 1 <38.49%>	1130 0 <4.84%>	420 0 <1.80%>	11187 0 <47.90%>	1630 0 <6.98%>	23.356 1 <18.74%>
1601-1640	42398 0 <76.98%>	2240 0 <4.07%>	105 0 <0.19%>	1767 0 <3.21%>	8567 12 <15.56%>	55077 12 <44.18%>
1641-1660	9890 4 <93.41%>	240 0 <2.27%>	10 0 <0.09%>	- <%>	448 0 <4.23%>	10588 4 <8.49%>
合計	65669 7 <52.68%>	3700 0 <2.97%>	1581 13 <1.27%>	31961 0 <25.63%>	21751 4 <17.45%>	124.663 4

Jordan; 1959 p385 より引用

図 3-1 貴族



Jordan; 1959 p385 より作成

② 上層ジェントリ

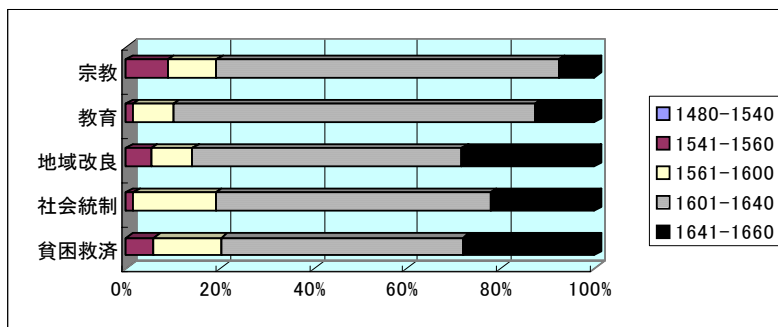
上層ジェントリは、比較的小さな集団で、慈善金額も全体の約5%を占めるにすぎない。多くは貧困救済にチャリティが拠出されており、約36%である。ただ、国王や貴族層に比べると、慈善の対象が自分の居住するコミュニティに対してなされる割合が格段に高くなる傾向がある。とはいっても地域によって貧困救済に当てられるチャリティの割合には24%から76%まで大きな開きがある。教育へのチャリティも大きな比重を占めているが、その対象の多くは文法学校 grammar schools へ拠出されたものである。宗教に対するチャリティも約23%あり、全体の中では平均的な数字である。その内訳としては、チャントリーや祈祷prayersへの拠出が大きな割合を占めている。宗教への拠出についても、貧困救済同様、地域によって大きなばらつきがある。傾向としては、地方へ行くほど宗教の占める割合が高くなるが、都市部（ロンドンなど）へ行くほど低くなっている。これは都市部の住民のほうが世俗化secularizationが進んでいる結果であると考えられる。

表 4-2 上層ジェントリ

	貧困救済	社会適応	地域改良	教育	宗教	計
	£ s	£ s	£ s	£ s	£ s	£ s
1480-1540	4180 16 <12.85%>	123 11 <0.38%>	483 6 <1.48%>	5374 5 <16.51%>	22388 14 <68.78%>	32550 12 <18.96%>
1541-1560	3464 13 <60.08%>	130 17 <2.27%>	157 0 <2.72%>	631 0 <10.94%>	1383 8 <23.99%>	5766 18 <3.36%>
1561-1600	8485 14 <51.60%>	1444 18 <8.78%>	265 0 <1.61%>	4624 6 <28.12%>	1626 5 <9.89%>	16446 3 <9.58%>
1601-1640	30312 17 <34.16%>	4822 10 <5.43%>	1713 0 <1.93%>	40445 11 <45.57%>	11449 13 <12.91%>	88743 11 <51.70%>
1641-1660	16472 3 <58.51%>	1836 13 <6.53%>	842 0 <2.99%>	6705 7 <23.82%>	2295 2 <8.15%>	28151 5 <16.40%>
合計	62916 3 <36.65%>	8358 9 <4.87%>	3460 6 <2.02%>	57780 9 <33.66%>	39143 2 <22.80%>	171658 9

Jordan; 1959 p385 より引用

図 3-2 上層ジェントリ



Jordan; 1959 p385 より作成

③ 下層ジェントリ

下層ジェントリは、上層ジェントリより4倍強ほど多い集団であるが、チャリティ金額はあまり変わらない程度である。やはり貧困救済のしめる割合が高いが（44.5%）、それは上層ジェントリより高い割合である。やはり自己の居住するコミュニティへの拠出がほとんどであり、いくつかの教区では上層・下層ジェントリがその教区の貧困救済の半分を担っているほどであるという。一方社会適応や地域改良にはあまりチャリティが拠出されていない。ただ、徒弟制度やワークハウスへのチャリティには関心があり、実際彼らの子ども達はその恩恵にあずかっているパターンも珍しくなかったのである。教育への関心も高いものであったが、これは上層ジェントリ同様、文法学校等への拠出が大半であった。宗教へのチャリティも上層ジェントリ同様の傾向であり、チャントリーや祈祷に対する拠出が多かった。

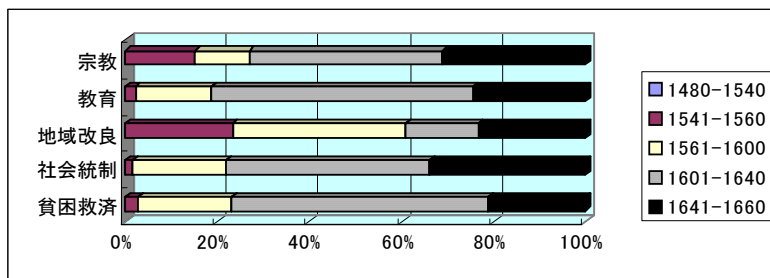
上層・下層ジェントリは、すべての教区において重要で、責任ある立場であった。彼らは地域社会のニーズに密着しており、貧困救済から教育、宗教組織・建造物の維持まで、地域社会の福祉の大いに貢献していたのである。

表4-3 下層ジェントリ

	貧困救済		社会適応		地域改良		教育		宗教		計	
	£	s	£	s	£	s	£	s	£	s	£	s
1480-1540	5137	5	161	7	2815	10	3105	11	26331	11	37551	4
	<13.68%>		<0.43%>		<7.50%>		<8.27%>		<70.12%>		<20.74%>	
1541-1560	2047	18	109	1	599	0	890	0	2937	18	6584	3
	<31.10%>		<1.66%>		<9.10%>		<13.52%>		<44.62%>		<3.64%>	
1561-1600	15397	8	1394	13	962	13	6496	7	2313	3	26564	4
	<57.96%>		<5.25%>		<3.62%>		<24.46%>		<8.71%>		<14.67%>	
1601-1640	41992	18	3000	1	405	12	22193	0	8166	13	75758	4
	<55.43%>		<3.96%>		<0.54%>		<29.29%>		<10.78%>		<41.82%>	
1641-1660	16043	12	2307	0	599	10	9596	0	6088	10	34634	12
	<46.32%>		<6.66%>		<1.73%>		<27.71%>		<17.58%>		<19.12%>	
合計	80619	1	6972	2	5382	11	42280	18	45837	15	181092	7
	<44.52%>		<3.85%>		<2.97%>		<23.35%>		<25.31%>			

Jordan; 1959 p385 より引用

図3-3 下層ジェントリ



Jordan; 1959 p385 より作成

④ ヨーマン

ヨーマンは大きな集団であるが、慈善金額は少なく、ヨーマン全体の86%が一番最低ランクの慈善金額の範囲に属している。つまり一人あたりの金額はかなり低い、ということである。

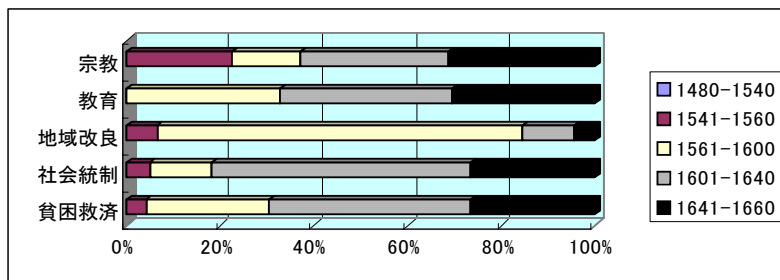
貧困救済に対する拠出が大半（56%）を占めているが、これは彼らが貧困の身近にすんでおり、貧困を目の当たりにする機会が多かったこと、そして浮浪乞食などの貧困からの迷惑行為に接する機会が多かったことから貧困救済への意識が高まったものと考えられる。よって救貧院への拠出より直接的な施与、居宅保護への拠出が多かった。社会適応への関心は低かったが、地域改良への関心は比較的高い。とくに道路の建設・維持への拠出が多いが、これは地方の交通事情の悪さと混乱を表しているといえる。教育へのチャリティは平均の半分だが、その中の文法学校への拠出の割合は他の階層よりも高いものであった。宗教へのチャリティもほぼ平均どおりである。

表 4-4 ヨーマン

	貧困救済	社会適応	地域改良	教育	宗教	計
	£ s	£ s	£ s	£ s	£ s	£ s
1480-1540	756 8 <11.74%>	30 12 <0.47%>	453 6 <7.03%>	<%>	5203 14 <80.75%>	6444 0 <13.97%>
1541-1560	1045 12 <47.77%>	59 9 <2.72%>	160 12 <7.34%>	<%>	923 7 <42.18%>	2189 0 <4.75%>
1561-1600	6693 13 <57.98%>	154 17 <1.38%>	1911 10 <16.56%>	2186 12 <18.94%>	597 13 <5.18%>	11544 5 <25.03%>
1601-1640	10844 7 <69.98%>	653 0 <4.21%>	269 3 <1.74%>	2431 6 <15.69%>	1297 13 <8.37%>	15495 9 <33.60%>
1641-1660	6722 8 <64.38%>	313 13 <3.00%>	106 14 <1.02%>	2026 16 <19.41%>	1272 9 <12.19%>	10442 0 <22.64%>
合計	26062 8 <56.52%>	1211 11 <2.63%>	2901 5 <6.29%>	6644 14 <14.41%>	9294 16 <20.16%>	46114 14

Jordan; 1959 p386 より引用

図 3-4 ヨーマン



Jordan; 1959 p386 より作成

⑤ 農民・農業労働者

この階層が一番寄付者の数が多いが、ヨーマン同様、寄付の金額はかなり低いといえる。全体の金額の約1%程度の金額である。慈善の対象もほぼ貧困救済と宗教に割り当てられており、社会適

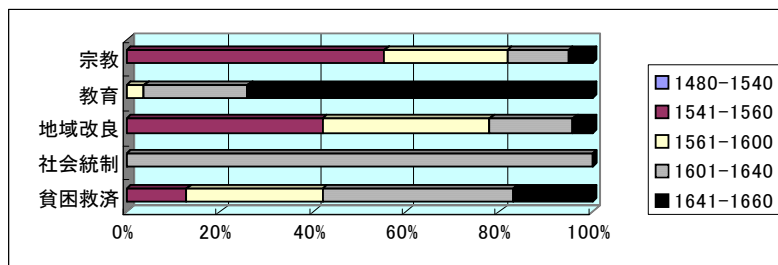
応、地域改良、教育への拠出はほとんどない（貧困救済と宗教でこの階層のチャリティの約95%を占めている）。貧困問題への関心はヨーマン同様、自己の身近あるいは自己の問題として意識されていることによっている。また彼らは貧しく、質素で、保守的な思想の持ち主であったため、宗教改革の影響はずいぶん遅れてやってきたと考えられる。そのため素朴な信仰心によるチャリティが多く、教会の修理や維持に多くの拠出をおこなっている。全体に中世的な宗教観・救済観がチューダー期をとおして支配的であり、そのため貧困救済の手段も直接的施与 direct alms がほとんどであった。

表4-5 農民・農業労働者

	貧困救済	社会適応	地域改良	教育	宗教	計
	£ s	£ s	£ s	£ s	£ s	£ s
1480-1540	27 11 <3.81%>	10 5 <1.42%>	25 6 <3.50%>	<%>	658 7 <91.25%>	721 9 <25.62%>
1541-1560	178 7 <33.83%>	0 1 <0.01%>	21 1 <3.99%>	0 1 <0.01%>	327 15 <62.16%>	527 5 <18.73%>
1561-1600	407 12 <69.59%>	0 17 <0.15%>	18 10 <3.16%>	2 1 <0.35%>	156 14 <26.75%>	585 14 <20.80%>
1601-1640	569 4 <84.71%>	2 10 <0.37%>	9 9 <1.41%>	12 0 <1.79%>	78 15 <11.72%>	671 18 <23.86%>
1641-1660	237 5 <76.67%>	<%>	2 2 <0.68%>	40 0 <12.93%>	30 2 <9.73%>	309 9 <10.99%>
合計	1419 19 <50.43%>	13 13 <0.48%>	76 8 <2.71%>	54 2 <1.92%>	1251 13 <44.45%>	2815 15

Jordan;1959 p386 より引用

図3-5 農民



Jordan;1959 p386 より作成

⑥ 高位聖職者・下位聖職者

高位聖職者は、人数は少ないが金額は多く、一人あたりの拠出金額は約881ポンドと、王室について多い金額になっている。一方下位聖職者は一人あたりの拠出金額は約90ポンドと、高位聖職者に比べるとかなりの差があるといえる。ただ、聖職者として考えれば、拠出金額の多寡はあるが、チャリティの内容、考え方にはほぼ共通したものがみられる。まず貧困救済への割合が低いことである。とくに高位聖職者は約10%と、すべての階層の中で最低の割合である。しかも貧困救済の方

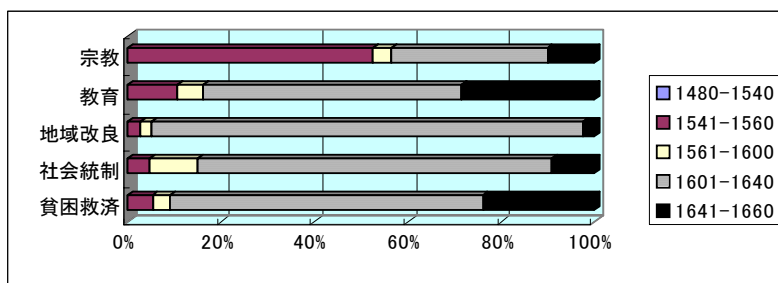
法も救貧院への施与が中心であり、直接施与や居宅保護への拠出割合は低かった。それは聖職者が冷淡であった、ということではなく、貧困救済の効率をも考えた結果であるともいえる。聖職者は社会適応や地域改良への関心をほとんど示していないが、教育への拠出は専門職層とならんでチャリティの大半をあてている。ただその内容は大学教育へのチャリティがほとんどである。宗教へのチャリティは意外にも少ない。彼らが人々に説教やパンフレットを通してチャリティの促進を盛んに行っていたことを考えれば、なおさらである。下位聖職者の特徴としては、上位聖職者よりは貧困救済への拠出割合が高いこと（倍以上）、教育への内容に大学教育以外の文法学校や奨学金支援が含まれていることである。

表 4－6 聖職者

	貧困救済	社会適応	地域改良	教育	宗教	計
	£ s	£ s	£ s	£ s	£ s	£ s
1480-1540	1282 11 <3.89%>	114 9 <0.35%>	1095 5 <3.32%>	15513 5 <47.03%>	14982 0 <45.42%>	32987 10 <23.38%>
1541-1560	1908 4 <11.65%>	150 6 <0.92%>	138 16 <0.85%>	4930 7 <30.10%>	9256 8 <56.50%>	16384 1 <11.61%>
1561-1600	1342 13 <26.38%>	323 1 <6.35%>	121 11 <2.39%>	2595 3 <51.02%>	704 19 <13.86%>	5086 7 <3.61%>
1601-1640	24046 13 <38.42%>	2365 2 <3.78%>	4552 3 <7.27%>	25754 16 <41.15%>	5870 1 <9.38%>	62588 15 <44.36%>
1641-1660	8572 7 <35.67%>	281 0 <1.17%>	122 0 <0.51%>	13277 0 <55.24%>	1781 4 <7.41%>	24033 11 <17.04%>
合計	37151 8 <26.33%>	3233 18 <2.29%>	6029 15 <4.27%>	62070 11 <44.00%>	32594 12 <23.10%>	141080 4

Jordan; 1959 p386 より引用

図 3－6 聖職者



Jordan; 1959 p386 より作成

⑦ 大商人

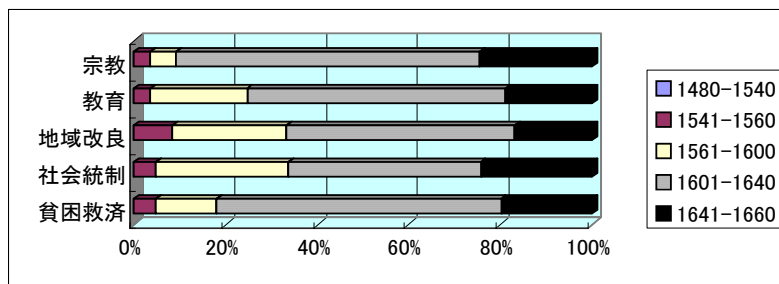
大商人層は、人数も多いが金額もけた違いに多く、全チャリティの中で占める割合は約43%にも上っている。彼らは後に述べるような貧困観や社会観、教育観、宗教観などにに基づき、ロンドン、ブリストルなどの大都市はもとより地方都市にいたるまでほぼ同時期にチャリティ全般にわたる拠出を行った。彼らの熱心なチャリティ行為に比例して、彼らの存在や社会的影響力も増大し、冒頭に述べたように当時の社会・文化を牽引する役割を担うようになったのである。

表4-7 大商人

	貧困救済	社会適応	地域改良	教育	宗教	計
	£ s	£ s	£ s	£ s	£ s	£ s
1480-1540	29737 0 <23.31%>	8830 5 <6.92%>	15844 4 <12.42%>	11426 0 <8.96%>	61716 17 <48.38%>	127554 6 <9.52%>
1541-1560	23786 6 <42.90%>	8782 7 <15.83%>	6601 9 <11.90%>	11631 14 <20.97%>	4660 18 <8.40%>	55472 14 <4.14%>
1561-1600	68479 5 <31.85%>	52498 1 <24.41%>	19036 7 <8.85%>	68210 16 <31.72%>	6803 0 <3.16%>	215027 9 <16.06%>
1601-1640	313269 12 <45.28%>	76202 10 <11.01%>	38230 10 <5.53%>	181630 7 <26.25%>	82564 17 <11.93%>	691897 16 <51.65%>
1641-1660	100430 10 <40.25%>	44276 2 <17.74%>	12919 19 <5.18%>	61305 1 <24.57%>	30615 1 <12.27%>	249546 13 <18.62%>
合計	535712 13 <39.99%>	190598 5 <14.23%>	92632 9 <6.92%>	334203 18 <24.95%>	186360 13 <13.91%>	1339498 18

Jordan; 1959 p387 より引用

図3-7 大商人



Jordan; 1959 p387 より作成

彼らも貧困救済には多くの関心を寄せ、約40%の拠出を行った。彼らは直接施与も行ったが、概してチャリティの方法に関しては慎重に注意深く行った。それは教育や勤労観の問題とも関わってくるが、無差別な施与が社会秩序を乱すと考えていたのである。徒弟制度の支援などを含む社会適応に約14%を拠出しているのも、大きく観れば貧困救済の方法としての位置付けであった。教育に関しても多くのチャリティを割いているが、特徴は文法学校への支出が多いことである。これは大商人層のチャリティの中でも18.16%を占めており、居宅保護（家計補助）が18.64%であるのに次いで第二位の割合である。それだけ教育、特に文法学校への想いが強いということの証左であろう。宗教に関しては約14%と、他の社会階層と比較してもかなり低い割合に抑えられている。宗教的には商人層はプロテスタントであり、一番世俗化が進んでいる層でもある。教会組織には対抗的であり（反聖職主義）、チャントリーなどへの寄付も最低のランクである。後にピューリタン講座への寄付も多くなってくることからも分かるように、カルヴァン主義的な側面が強くなり、貧困の原因としての無知を大いに嫌ったことが知られている。徒弟制度や文法学校への寄付の多さはここに由来しているといえるだろう。

⑧ 小商人

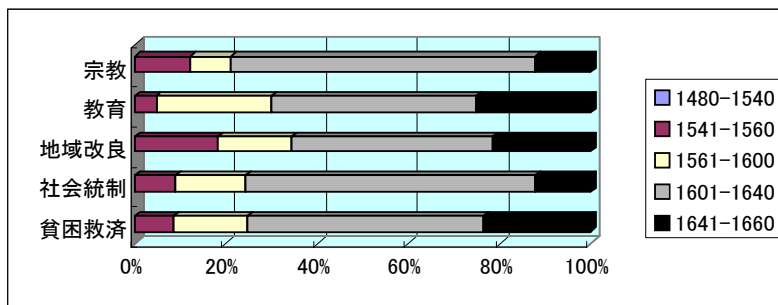
大商人の巨額のチャリティと比べれば見劣りする額であるが、自己の居住するコミュニティへの貢献意識の高さなど、大商人層とは一線を画するチャリティ傾向となっている。貧困救済に49%と高い割合が使われているが、関心は居宅保護や小教区 parochial での救貧活動が中心である。社会適応や地域改良へのチャリティも多く、その割合は全階層の中で一番多いものである。とくに貸し付け資金の基金への寄付やホスピタル建設・維持への寄付が多くを占めている。その一方で宗教への寄付は少なく、これは大商人層と共通するところである。教育への関心は高く、地元の文法学校や奨学金支援に多くの寄付が集まっている。大学への支援は少ない。

表 4－8 小商人

	貧困救済	社会適応	地域改良	教育	宗教	計
	£ s	£ s	£ s	£ s	£ s	£ s
1480-1540	4145 17 <23.25%>	132 14 <0.74%>	2857 15 <16.03%>	464 17 <2.61%>	10227 0 <57.36%>	17828 3 <11.91%>
1541-1560	5926 4 <49.09%>	2052 19 <17.01%>	1794 17 <14.87%>	877 0 <7.26%>	1422 0 <11.78%>	12073 0 <8.07%>
1561-1600	11231 13 <51.01%>	3496 11 <15.88%>	1568 15 <7.12%>	4664 7 <21.18%>	1057 0 <4.80%>	22018 6 <14.71%>
1601-1640	35748 14 <50.75%>	14344 19 <20.36%>	4303 9 <6.11%>	8221 13 <11.67%>	7822 15 <11.11%>	70441 10 <47.07%>
1641-1660	16359 18 <59.97%>	2749 16 <10.08%>	2095 2 <7.68%>	4641 2 <17.01%>	1436 2 <5.26%>	27282 0 <18.23%>
合計	73412 6 <49.06%>	22776 19 <15.22%>	12619 18 <8.43%>	18868 19 <12.61%>	21964 17 <14.68%>	149642 19

Jordan; 1959 p387 より引用

図 3－8 小商人



Jordan; 1959 p387 より作成

⑨ 職人

その多くは技術職人であるが、寄付人口の割に寄付金額が少ない（全体の0.28%）といえる。職人の仕事の特製から多くは都市部に居住しているが、それでも地方と都市では一人あたりの慈善寄付額に大きな違いがある。というのも、大都市ではとくに独立した職人層が多く、彼らが一人あたりの寄付金額を上げているからである。

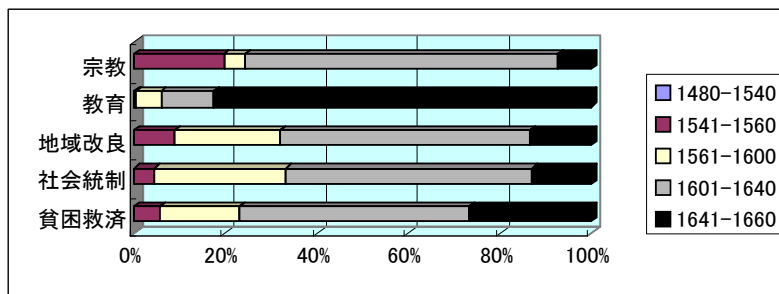
貧困救済にとくに関心が高く、職人層の寄付の約57%を占めている。方法としては直接施与は少なく、持続的でかつ有効な居宅保護にチャリティを遺す人が多い。それに関連して社会適応へのチャリティも多くなり、地域改良も同様に多くなっている。これは地域社会への愛着と住民としてのプライドから、地域社会の秩序維持を念頭していた結果と考えられる。一方、教育に対する関心は低く(5.67%)、自分の子どもたちへの教育にも熱心ではなかった。宗教に対する関心は比較的高く、平均以上の寄付割合である。おそらく彼らが地域社会と密着した生活を送っているところからくる結果であると考えられるが、素朴な宗教心から教会組織やチャントリー、祈禱などへの寄付が多くなっている。なお、これは農民層の宗教観と重なる部分が多いといえるだろう。

表4-9 職人

	貧困救済	社会適応	地域改良	教育	宗教	計
	£ s	£ s	£ s	£ s	£ s	£ s
1480-1540	481 5 <24.71%>	61 7 <3.15%>	159 16 <8.20%>	<%>	1245 11 <63.94%>	1947 19 <22.39%>
1541-1560	255 16 <53.95%>	27 3 <5.73%>	28 6 <5.97%>	2 0 <0.42%>	160 18 <33.93%>	474 3 <5.45%>
1561-1600	780 10 <71.46%>	172 14 <15.81%>	73 3 <6.70%>	27 9 <2.51%>	38 7 <3.51%>	1092 3 <12.55%>
1601-1640	2276 6 <67.11%>	325 5 <9.59%>	174 3 <5.13%>	57 12 <1.70%>	558 7 <16.46%>	3391 13 <38.99%>
1641-1660	1207 2 <67.30%>	77 10 <4.32%>	42 5 <2.36%>	406 2 <22.64%>	60 14 <3.38%>	1793 13 <20.62%>
合計	5000 19 <57.49%>	663 19 <7.63%>	477 13 <5.49%>	493 3 <5.67%>	2063 17 <23.72%>	8699 11

Jordan; 1959 p387 より引用

図3-9 職人



Jordan; 1959 p387 より作成

⑩専門職

この階層は人数は少ないが、一人あたりの金額は高いのが特徴である(一人あたり225ポンド)。人々は裕福で、かつ寛容であるためチャリティへの態度も明確であった。貧困救済にはそこそこ関心があったが、対象は救貧院などへの寄付が多かった。というのも居宅保護での救済には、その効率・実効性に懐疑的であり、結果として施設での保護への寄付が多くなったのである。社会適応や

地域改良には関心が薄かった。一番関心が高いのが教育への寄付である（49.49%）。貧困救済より教育への寄付が多いのは、聖職者層と同様である。そして文法学校よりも大学への寄付が多いのも聖職者層と同様である。宗教に対する関心、寄付はかなり低く、全階層の中で最低である（10.67%）。世俗化傾向は都市の大商人層と同じであり、時代の世俗的な傾向に強く反応したものと考えられる。

専門職層は、商人同様、時代の求めているものを敏感に察知し、なおかつそれへ応えられるだけの財力も十分に備えていた階層であるといえる。

5. ジェントリ層の進出

①貴族層・聖職者層の没落—社会的流動性

これまで見てきたように、16世紀を通して慈善の担い手はジェントリ層や商人層などの、いわゆる「中流階層」が主流となってきたことがわかる。それは一般に、封建制度の崩壊過程や相次ぐ国内外の戦争などで疲弊し、没落していった貴族層に代わって、初期資本主義の発達で経済的にも政治的にも力をつけてきたジェントリ層・商人層がイギリス近代の担い手として登場してきた結果と見られている。このような「貴族の没落—ジェントリの台頭」とワンセットでチューダー期の社会構造をとらえる議論の代表は、トーニーの『ジェントリの勃興』（1957）に代表的に見られ、のちに「ジェントリ論争」を引き起こしたのは有名である（越智：1966）。

【補註】ジェントリ論争について

トーニーは、修道院解散などによって発生した土地移動の結果、所領経営に積極的なジェントリ層は多くのマナーを入手し、他方で貴族層は放漫な所領経営によってマナーを手放して没落したと考えた。この議論を踏襲し、発展させたのがストーンであり、逆に激しい批判を浴びせたのがトレヴァー＝ローパーであった。

ローパーは、トーニーが主張するジェントリ層へのマナーの集中の算定には、ヨーマンから上昇してジェントリ層になった層の者を含めている一方で、ジェントリから貴族になったものも含めている。これらを除いてジェントリと貴族を考えれば、その数値は16世紀後半から17世紀前半までそれほど大きな変化はみられない。つまり貴族の犠牲によってジェントリが階級として成長してきたわけではなく、農業から利益を得て彼らが勃興してきたわけでもない。むしろ権力を獲得して豊かになったのは官職保有の恩恵に恵まれた一部の貴族やジェントリであった。ここに宮廷に於ける権力を獲得したグループとそこから排除されたグループの間に大きな

対立が生じ、後のピューリタン革命の伏線になったという。

こうした批判に対してストーンは、貴族層が没落したことから相対的にジェントリ層が上昇した点を指摘することで答えようとしている。彼によれば、16世紀半ばから後半にかけて貴族の収入は減少し、17世紀初頭に改善は見られるものの、伝統的な生活習慣とそれに伴う支出は変化しなかったために、貴族の地位は大きく後退を余儀なくされた。同時に貴族層が軍事的な力をほぼ喪失することによって、ジェントリは大きな独立性を確保することになったという。ストーンは、貴族の没落によって相対的にジェントリ層が浮上した、と説明する（道重：2000 p173-175）。

これらの論争は今日にいたるまで、明確に解決したとはいえていないという。

また慈善の担い手が教会組織や聖職者からジェントリや商人などの俗人へ移行してきた背景には、一連の宗教改革による教会の混乱がある。ヘンリー8世の宗教改革、それを継いだエドワード6世のプロテスタント化の推進、その後のメアリー1世のカソリックへの復教とプロテスタントへの弾圧、というように、宗教的立場が転々とする中で、聖職者は不足し、聖職から得られる禄の価値は下がり、聖職者の不足・不在は聖務の質の低下を招いた。当然宗教改革の担い手も不足し、プロテスタント化への宗教的変化も停滞しがちとなる。折からの修道院解散、チャントリ解散（1547、1549）によって救貧活動の拠点であり、担い手であった修道院や教会、チャントリが衰退していく中で、その土地を購入し、聖職者の代わりに自分たちでホスピタルや学校を建設し始めたのが俗人階級であり、その中心がジェントリや商人達であった（指：1988）。

表5 パトロネジの移動（％）

		国 王	俗 人	教会関係	修道院	その他
リンカン主教区	1521-35	5	35.8	12.4	40.6	6.2
	1536-47	21.4	55	9.4	8.8	5.4
カンタベリ主教区	1533-37	6	16	23.5	38.5	16
	1541-53	16	38	35.5	—	10.5
ウースター主教区	1535	7.4	28.4	19.4	42.6	2.2
	1585	11.9	58	25	—	5.1
ロンドン	1535	2.8	5.5	34.8	52.3	4.6
	1603	16.2	19.8	52.2	—	11.8
エセックス	宗教改革以前	4.6	37.4	11.6	41.5	4.9
	1558	17.1	68.2	10.9	—	3.8

指：1988 p104より一部引用

このように、必ずしも土地を所有する貴族が没落し、土地獲得の拡大を通してジェントリ層などの中流層が勃興してきた、と単純には図式化できない複雑な要因がまだまだあるだろうが、中流層

が経済的にも政治的にも力をつけ、この時代を牽引してきたことは事実である。

それを可能にしたのは、社会的な身分の流動性であろう。この時代における社会的序列は、決して静態的なものではなかった。ラズリットの身分階層表（表6）においても、一応ジェントルマンと非ジェントルマンとの区別は、肉体労働をしなくても糧を得られるかどうかという意味において、ジェントルマンとヨーマンを境目に設定されているが、この違いも富裕なヨーマンとジェントルマンの境目はあいまいであったし、実際に富裕なヨーマンが息子を大学にやって法律家などの専門職にしたり、貴族などの土地を買って肉体労働なしで暮らせるだけの土地を遺すことでジェントルマンにしたり、ということは存在していたのである（大野：1986 p4-5）。「…結局は、ジェントルマンの身分を確立し維持できるかどうかは土地財産の獲得と保持にかかっていた、ということである。生まれ、上品な生活様式、権威ある立場での活躍、といったものは、ゆたかな土地の所有という事実を補強する二次的な基準にすぎなかった。社会的な位階制の中で次ぎにランクされるのは、ジェントルマン身分に必要な資格を獲得するのに最も恵まれた位置にあるもの、つまり都市の富裕な商人や専門職、および農村の豊かなヨーマンであった（ライトソン：1991 p37）」。

彼らは実際に、以下で確認するように地方の名望家として地方行政への参加をとおして地域社会での権威を獲得したり、修道院や教会組織が担っていた学校建設・維持や道路・橋梁などの建設・維持に慈善を行い、そこに一族の名を冠するなどして名誉を獲得したり、子どもたちに積極的に教育を施し、一般教養と人格の陶冶を図ったりしたのである（Houlbrooke:1998 p114, Carpenter:1987 p67-68）。

表6 身分階層表

		階層	身分名	職業名
ジェントリ	大貴族	1. 公爵	貴族	
		大主教		
		2. 侯爵		
		3. 伯爵		
		4. 子爵		
	小貴族	5. 男爵	ジェントルマン	<専門職> 陸軍武官 医師 商人等
		主教		
		6. 准男爵		
		7. 騎士		
		8. エスクワイア	ヨーマン	ハズバンドマン
		9. ジェントルマン		
		聖職者		職業名(大工等)
		10. ヨーマン		
		11. ハズバンドマン		
		12. 手工業者 Craftsman		
		商店主 Tradesman		
		職人 Artificer		
		13. 労働者 Labourer	なし	労働者
		14. 小屋住 Cottager		
		貧困者 Pauper	なし	なし

大野:1986 p5より作成

②行政組織への参加

富の保有の水準によって地域社会内での社会的位相は左右されたようであるが、地域社会内における権威ある立場に立つ機会もそれに準じていたようである。州や教区において、指導的立場に立つ役職に選ばれるかどうかは、ジェントルマン身分の試金石でもあったのである。

ジェントリのなかでも上層のものは、副統監や郡治安官、議員（庶民院）、裁判官や治安判事などの地方行政の要職をつとめるものもいた。下層のジェントリや富裕なヨーマンなどは、教区やハンドレッドで教区委員 churchwarden、貧民監督官 overseer the poor、慈善金管理人 collectors、四季裁判所の陪審員などをつとめた。さらに下層のハズバンドマンや職人はこれらのような威信の高い地位につくことはできなかったが、教区委員補や治安官 constable などといったポストに就任していた（大野：1986 p19-31、トレヴェリアン：1983（1）p146-147、バリー・ブルックス：1998 p78-79、ライトソン：1991 p34-35, p51-53、山本：2001 p32-33）。

彼らは州、郡、教区内で重要な役割を担った。とくに本稿との関連で言えば、貧民の管理を掌握する治安判事や、その指導のもとで貧民管理を行う貧民監督官、慈善や救貧税の徴収と管理・再配分を行う慈善金管理人、浮浪・乞食を取り締まる治安官などは、本来聖職者中心で担われてきた役職を、俗人が管轄するようになったということである。しかも彼らはその役職にたいして全くの無給であり、通常1～2年単位で交代で担っていた。彼らの中には、その地域内での権威や名誉のためにすすんで役職に就く者もあったが、上級の官職（治安判事や裁判官など）以外は基本的には強制的にその役目を担わされてきたのである。拙稿でも確認したように、当時の救貧法文中でも、もしそれらの役職に就くことを拒んだ場合には、罰則が設けられていたほどである（松山；2003b）。

6. 小まとめ — むすびにかえて

以上、ジョーダンの研究をもとに当時のチャリティの担い手について概観してきた。これらの担い手の変化を促した思想的・宗教的背景についての検討は別稿で行うとするが、その論点整理もかねて本稿でわかったことをまとめておきたい。

①宗教改革期（1540–1560年代頃）を挟んでの変化

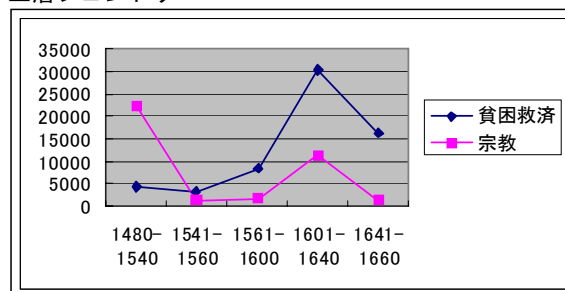
宗教改革前は、宗教へのチャリティが多くを占めていた。しかし1540年代以降、そのトップは貧困救済へと移っていく。一部では貧困救済よりも教育への関心が高くなる階層もあるが（聖職者層・専門職層）、それらの階層でも貧困救済は高い割合であることにはかわりはない。ただ、宗教が衰退し、それ以外の世俗的なチャリティが台頭してくる時期に、階層ごとの若干の時間差・温度差

があることもわかった。たとえば商人層は宗教から貧困救済への転位が急速であり、ほぼ1540年ごろには入れ替わる。そして入れ替わってからの頂点と底辺への移行も急速である。一方農民層のそれは緩やかであり、1550年ごろに入れ替わり始めるが、その後徐々にそれぞれ下降・上昇をし、1600年ごろに頂点と底辺をむかえる。(図4参照)

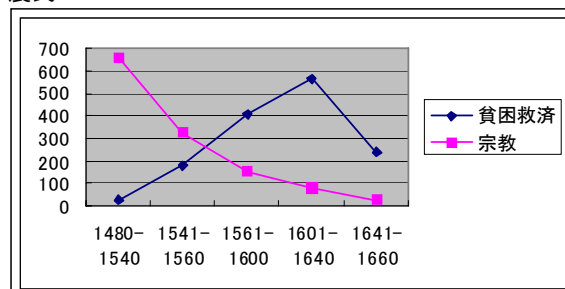
チャリティの内容・量の変化に宗教改革はおおきな役割を果たしていることは間違いないが、その変化が実際のチャリティ行為へと反映される速度には、階層ごとの差が現れるといえる。

図4

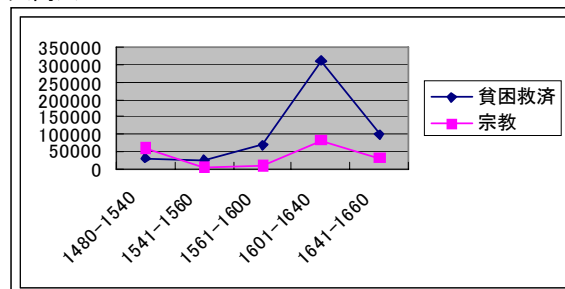
上層ジェントリ



農民



大商人



Jordan; 1959 p385-387 より作成

②教育への関心の違い

チューダー期を通して教育への関心が高まることは周知の通りであるが、階層によって教育への関心の度合いや対象の違いがあることがわかった。ジェントリや聖職者、商人や専門職など、おもに都市で暮らす階層には教育への関心の高さがうかがわれた。一方農民や職人などの地方在住者や下層住民は、貧困救済や宗教への関心が高く、教育についての関心は低いことが分かる。一つはジェントリや商人層は、自分の子息への教育を確保する、という目的があることが挙げられる。ヒューマニズムによる教育思想の発達やカルヴァン主義的な勤労観・倫理観から無知を克服し、知識を身に付けることで貧困を防ぎ、社会の改良を導くという思想が、人々の使命感として定着したと考えられるだろう。下層住民は浮浪乞食層とあまり差がなく、むしろ徒弟制度などの恩恵を受ける側であったと考えられる。だから自己の子息への教育、という考えがまだ十分に浸透していないのである。

教育については、ジェントリや商人層と聖職者・専門職とのあいだで寄付の対象に違いが見られる。前者はおもに文法学校や奨学金などに関心が高いが、後者は大学教育のほうに関心が高いことがわかる。一般的な教育の普及を目指すのか、高等教育に重点をおくのか、という違いであるが、これもヒューマニズム思想や初期資本主義の発達過程と合わせて考えると、それぞれの動機の違いは明確であろう。

③寄付人口と寄付金額の実態

「3. 主体ごとの depth of giving について」でも触れたことだが、小口の寄付者が圧倒的に多く、チャリティの大半は少数の多額寄付者により支えられていることがわかった。つまり、チャリティの動向を左右するのは、寄付者数の多い階層の影響というよりは、寄付金額の多い階層の影響によるところが大きい、ということにあらためて気付かされたわけである。時代の状況は世俗化傾向にあり、初期資本主義の発達を支えるための労働者教育や初等教育の必要性・重要性は、どの階層であつても反対は無いはずである。ただ、それぞれの階層にそれらを支える社会思想や宗教思想が浸透するのは時間差と温度差があることも確認した。そうすると、どの時期に、どの階層がチャリティの実態を担っているのか、ということによってはチャリティの性格付けにも変更が生じるかもしれないのである。それは単純に、「1540年以降を宗教改革後だからプロテスタンティズムにもとづくチャリティが中心になった」とは言い切れない、ということの意味しているのである。(たとえば、教育の力をベースに社会適応をも貧困救済の一方法とみなして、社会改革の実現も考えているジェントリ層や商人層がチャリティの実権を持つ時代と、底辺からの改革よりは上流層の高等教育に関心が高く、貧困救済は二の次である聖職者層や専門職層が実権を持つ時代では、当然チャリ

ティの意味合いや方向性は異なっているはずである。) 繰り返しになるが、誰がその時代のチャリティの中心であるのか、ということを念頭に時代分析をしなければならない、ということである。

④「担い手の世俗化」の二面性

ヨーロッパ全体にも共通することだが、宗教改革とそれによるプロテスタントの誕生は、政治の世俗化、国家の世俗化を推進したといえる。「中世国家は、権力の理論付けの面でも、統治の面でも、キリスト教の体系に極めて大きく依存していた。したがってここにいる政治や国家の世俗化とは、西欧に於ける政治原理、国家原理のキリスト教体系からの自立化、すなわち政教分離と世俗化された国家への教会の従属化を意味する(城戸：1976 p1)」。拙稿においても大陸に於ける諸都市の救貧事業を概観してきたが(松山：2004, 第2章)、そこにおいても救貧をつかさどっていた教会組織や聖職者に代わって、市参事会を中心とした俗人が貧民の管理(貧民の調査や事前の徴収・管理・再配分、救済施設の運営など)を担うようになっていた。イギリスにおいては、大陸諸都市と異なり、国家そのものが16～17世紀にかけて世俗化していくのであるが、その俗人支配の準備、つまり統治手段の世俗化・行政機関の世俗化は中世後期から進んでいたという(城戸：1976 p1-2)。

ジョーダンの研究からも、社会経済的に力を蓄えてきたジェントリ層や商人層が慈善寄付金額の面においても主流となり、宗教改革以降は慈善施設や学校の設立・経営、公共事業、徒弟制度まで行うようになった様子がわかる。それまでの貴族や聖職者が中心だった慈善寄付・運営の担い手が、世俗化してきたということが出来る。あわせて、地方行政の役人としても社会参加を果たし、救貧事業全般において重要な役割を果たすことになった。このように、「担い手の世俗化」には「慈善寄付の世俗化」と「救貧事業運営管理の世俗化」という二側面があるといえよう。

* この研究報告は2003年度法政大学特別研究助成金を受けて作成されたものです。

【文献一覧】

- Brigden. S (1984) Religion and Social Obligation in Early Sixteenth Century London, in *Past and Present*, 103
- Brown. A. D (1995) *Popular Piety in Late Medieval England; The Diocese of Salisbury 1250-1550*, Oxford
- Carpenter. C (1994) Gentry and Community in Medieval England, in *Journal of British Studies*, 33-4
- Carpenter. C (1987) The religion of the Gentry of Fifteenth-Century England, in Williams. D ed, *England in the Fifteenth Century*, London

- Claire. S. S (2002) *Charity and Lay Piety in Reformation London 1500-1620*, Ashgate
- Cullum. P. H and P. J. P. Goldbeerg (1993) Charitable Provision in Late Medieval York; to the praise of God and the use of the poor, in *Northern History*, 29,
- Dauntun. M (1996) *Charity, self-interest and welfare in English past*, London
- Fehler. T. G (1999) *Poor Relief and Protestantism; The Evolution of Social Welfare in Sixteenth-Century Emden*, Ashgate
- Fleming. P. W (1984) Charity, Faith, and the Gentry of Kent 1422-1529, in Pollard. T ed, *Property and Politics; Essays in Later Medieval English History*, Gloucester
- French. K, G. Gibbs and B. A. Kumin eds. (1997) *The Parish in English Life 1400-1600*, Manchester
- Gilbert. W (1877) *The City; An Inquiry into the Corporation its Livery Companies. and the Administration of their Charities and Endowments*, London
- Gray. B. K (1967) *A History of English Philanthropy*, London
- Grell. O. P (1996) *Calvinist Exiles in Tudor and Stuart England*, Scholar Press
- Grell. O. P (1997) The Protestant imperative of Christian Care and neighbourly love, in Grell .O.P and A.Cunningham eds, *Health Care and Poor Relief in Protestant Europe 1500-1700*, London
- Haigh. C (1993) *English Reformations; Religion, Politics, and Society under the Tudors*, Oxford
- Heal. F and C. Holmes (1994) *The gentry in England and Wales. 1500-1700*, Macmillan
- Hindle. S (2000) *The state and social change in early modern England. C.1550-1640*, Macmillan
- Houlbrooke. R (1998) *Death, Religion and the Family in England 1480-1750*, Oxford
- Houlbrooke. R (1984) *The English Family. 1450-1700*, Longman
- Jones, C (1996) Some recent trends in the history of charity, in Dauntun. M ed, *Charity, self-interest and Welfare in the English Past*, UCL press
- Jones. G (1969) *History of the Law of Charity 1532-1827*, Cambridge
- Jordan. W. K (1959) *Philanthropy in England 1480-1660*, London
- Jordan. W. K (1960a) *The Charities of London 1480-1660*, London
- Jordan. W. K (1960b) *The Forming of the Charitable Institutions of the West of England; A Study of the Changing Pattern of social Aspirations in Bristol and Somerset 1480-1660*, Philadelphia
- Jordan. W. K (1961) *The Charities of Rural England 1480-1660*, London
- Macintosh. M (1988) Local responses to the poor in late medieval and Tudor England, in *Continuity and Change*, 3-2
- Queen. S. A (1922) *Social Work in the Light of History*, Philadelphia

- Rubin. M (1987) *Charity and Community in Medieval Cambridge*, Cambridge
- Slack. P (1985) *The impact of plague in Tudor and Stuart England*, Routledge and Paul
- Slack. P (1988) *Poverty and policy in Tudor and Stuart England*, Longman
- Smith. J. D (1995) *The Voluntary Tradition Philanthropy and selfhelp in Britain 1500-1945*, Rochester
- Tawney. R. H (1948) *Religion and the Rise of Capitalism*, Pelican Edition
- Thomson. J. A. F (1965) Piety and Charity in Late Medieval London, in *Journal of Ecclesiastical History*, 16,
- Van Leeuwen. M. H. D (1994) Logic of Charity: Poor relief in Preindustrial Europe, in *Journal of Interdisciplinary History*, 24-4,
- 新井由紀夫 (1986) 「十五世紀前半のイングランドに於けるジェントリとアフィニティージェントリの遺言書からの分析」 史学雑誌95編 8 号
- 新井由紀夫 (1990) 「15世紀イングランドにおけるジェントリとフラタニティ」 西洋史研究19号
- 新井由紀夫 (1999) 「マーガレット・パストンの遺言書——一通の遺言書が語る、十五世紀イングランドのジェントリ女性——」 お茶の水史学43号
- 市瀬幸平 (1974) 「チューダー朝の私的慈善活動」 関東学院大学文学部紀要第14号
- 岩井・指編 (2000) 『イギリス史の新潮流—修正主義の近世史』 彩流社
- 植村雅彦 (1967) 『チューダー・ヒューマニズム研究序説』 創文社
- 大野真弓 (1977) 『イギリス絶対主義の権力構造』 東京大学出版会
- 大野真弓 (1986) 「エリザベス朝の貴族とジェントルマン—政治上における活動分野—」 フェリス女学院大学紀要21号 p1-38
- 岡田与好 (1970) 『イギリス初期労働立法の歴史的展開 (増補版)』 お茶の水書房
- 越智武臣 (1966) 『近代英国の起源』 ミネルヴァ書房
- 金澤周作 (2000) 「近代英国におけるフィランソロピー」 史林83巻 1 号
- 河原温 (2000) 『中世フランドルの都市と社会—慈善の社会史—』 中央大学出版部
- ライトソン (中野忠訳) (1991) 『イギリス社会史1580-1680』 リプロポート
- 出口勇蔵監修 (1957) 『近世ヒューマニズムの経済思想—イギリス絶対主義の一政策体系』 有斐閣
- 城戸毅 (1976) 「中世末期イギリスにおける中央行政機関への俗人の進出について」 史学雑誌 76 巻10号
- ゲレメク (早坂真理訳) (1993) 『憐れみと縛り首—ヨーロッパ史のなかの貧民』 平凡社
- 斎藤新治 (1997) 『中世イングランドの基金立文法学校成立史』 亜紀書房

- 指昭博 (1984) 「チューダー中期における教区教会と民衆」待兼山論叢18号
- 指昭博 (1988) 「イングランド宗教改革期の教区聖職者」史林71巻1号
- サルガードー (松村赳訳) (1985) 『エリザベス朝の裏社会』刀水書房
- 高島進 (1979) 『イギリス社会福祉発達史論』ミネルヴァ書房
- 高島進 (1995) 『社会福祉の歴史 慈善事業・救貧法から現代まで』ミネルヴァ書房
- 高橋基泰 (1999) 『村の相伝 (英国近代編) 一親族構造・相続慣行・世代継承一』刀水書房
- 高橋基泰 (2000) 「近代初期英国遺言書に言及された身分・職業分布と経済」愛媛経済論集第19巻第2号
- 田中峰雄 (1980) 「中世都市の貧民観」京大人文科学研究所『前近代の都市と社会層』所収
- 田巻敦子・池上忠弘 (1998) 「中世イングランドの教会寄進と教区聖職者」成城文芸164号
- デービス (成瀬駒男他訳) (1987) 『愚者の王国・異端の都市—近代初期フランスの民衆文化』平凡社
- 出羽秀明 (1997) 「ロンドンのクラフトギルドにみる相互扶助の側面」東海学園女子短期大学紀要32号
- 出羽秀明 (1999a) 「中世後半、リヴァリ・カンパニーにみる慈善的側面」東海学園女子短期大学紀要34号
- 出羽秀明 (1999b) 「16世紀後半、リヴァリ・カンパニーの慈善団体への変容」東海学園女子短期大学紀要35号
- 出羽秀明 (2000) 「16世紀ロンドンにおける救貧組織」東海学園女子短期大学紀要36号
- トーニー (浜林正夫訳) (1957) 『ジェントリの勃興』未来社
- トレヴェリアン (松浦・藤原・今井訳) (1983) 『イギリス社会史1・2』みすず書房
- 浜林正夫 (1987) 『イギリス宗教史』大月書店
- 浜林・篠塚・鈴木編訳 (1965) 『原典 イギリス経済史』御茶の水書房
- バリー、ブルックス (山本正監訳) (1998) 『イギリスのミドリリング・ソート』昭和堂
- 道重一郎 (2000) 「中流階層とジェントリ」岩井・指編 (2000) 『イギリス史の新潮流—修正主義の近世史』彩流社所収
- 松山毅 (2001) 「イギリス近世初期の慈善活動の成立過程に関する一考察—Statute of Charitable Uses. (1601) を中心に一」日本福祉教育専門学校紀要第9巻1号
- 松山毅 (2002a) 「Statute of Charitable Uses.(1601)に関する一考察—概要と論点整理を中心に—」社会福祉学第42巻2号
- 松山毅 (2002b) 「イギリス・チューダー期における旧救貧法読解—「救済対象」と「救貧財源」の

変遷を中心に」日本福祉教育専門学校紀要第10巻1号

松山毅 (2003) 「イギリス・チューダー期におけるチャリティに関する研究動向—W. K. Jordan の研究を中心に」現代福祉研究 (法政大学) 第3号

松山毅 (2004) 「イギリス・チューダー期におけるチャリティに関する研究—慈善信託法 (1601) の成立背景を通して—」日本社会事業大学博士学位請求論文 (未刊行)

宮川剛 (2001) 「近世ロンドンの教区における救貧」史林84巻1号

宮川剛 (2002) 「近世イギリスにおける慈善の諸相」Harmonia (京都市立芸大紀要) 32

宮腰英一 (2000) 『十九世紀英国の基金立文法学校—チャリティの伝統と変容』創文社

山代宏道 (1996) 『ノルマン征服と中世イングランド教会』溪水社

山本信太郎 (1999) 「イングランド宗教改革とチャントリの解散」西洋史学194号

山本範子 (1993) 「近代初期イギリスにおける教会裁判所と社会統制」西洋史学169号

吉田久一・高島進 (1964) 『社会事業の歴史』誠信書房

吉田久一・岡田英己子 (2000) 『社会福祉思想史入門』勁草書房